

平成 23 年度卒業式式辞

本日、晴れて卒業式を迎える人文学部国際コミュニケーション学科の 174 名の皆さん、人文学部人間科学科の 123 名の皆さん、現代経営学部現代経営学科の 175 名の皆さん、そして大学院の現代経営研究科の 2 名の皆さん、卒業おめでとうございます。

併せて、この晴れの日を長い間楽しみにして来られましたご家族の皆様に、心からのお慶びを申し上げます。

また、学生の教育や日常のさまざまな指導・支援に携わって来られた教・職員の皆様にも、そのご苦勞に、感謝の言葉を送りたいと思います。

東洋学園大学は、平成 4 年 4 月に開設されて以来、満 20 年が経過しました。大学そのものの歴史は決して長くはありませんが、その母体である『東洋学園』の高等教育に関わる歴史を顧みますと、その源は、大正 15 年に開設された東洋女子歯科医学専門学校にまで溯ります。

この歯科医学専門学校は 25 年の歴史を刻み、卒業生は女性歯科医師として、日本の衛生領域において多大の活躍をいたしました。しかし、戦災による損失が大きかったことから、太平洋戦争終了 5 年後の昭和 25 年に閉校を余儀なくされ、その後英語教育で高い評価を得た東洋女子短期大学へと生まれ変わりました。この短期大学の歴史も併せますと、『学校法人 東洋学園』は、実に 86 年もの高等教育の歴史を有しております。

今日卒業される皆さんは、このような輝かしい歴史と伝統を引き継いだ『東洋学園大学』で学び、価値ある学生生活を送り、そしていま、晴れて巣立つことになりました。

皆さんは、本学に入学してからは、学生生活の前半の 2 年間は、自然豊かな、

そして時間の流れのゆったりと感じられる流山のキャンパスでのびのびと、学生としての大切な基本と良識を身につけるための豊かな時を過ごされました。そして後半の 2 年間は、東京のまさに都心であるこの本郷のキャンパスで、専門的な深い内容の勉強と、価値ある社会人となるための素養を磨きつつ、今日の日を迎えられました。皆さんは今、晴れて東洋学園大学に別れを告げることにになりました。これからは、社会の荒波の中で揉まれ鍛えられ、さらに成長してくれるものと、心より期待しております。

皆さんがこれから辿るであろうその道程は、決して平坦なものではないと思いますが、東洋学園大学で培った『力』と『誇り』をもって、その荒波の一つ一つを着実に乗り越えて行ってください。

ところで、今年の今日は、皆さんの 1 年先輩の卒業式でした。その 9 日前に発生した東日本大震災に引き続く強い余震のため、万全の対策を講じつつも、終始緊張した式典でした。

それから早 1 年が過ぎ去りました。しかしいまだに余震が散発し、新聞紙上には連日のごとく、復旧・復興についての記事が見受けられます。このようなことから、本日は、東日本大震災に焦点を当てて、話を進めてみたいと思います。

今年の 3 月 11 日、午後 2 時 46 分、東北地方の太平洋沖を南北に約 500 キロにも及ぶ広大な地域を中心とした巨大地震が突如として発生しました。同時に岩手県、宮城県、福島県、茨城県の沿岸地帯を中心として、関東各地にも及ぶ想像を絶する巨大な津波が押し寄せました。そしてこの 3 月 19 日現在の数字として 1 万 5 千 854 名の貴い命が奪われ、3 千 155 名の方々の行方がいまだに分かりません。地震と津波により被災した家屋は膨大な数に上りました。

しかも不幸なことに、福島県では、津波により被災した原子力発電所が、建

屋内に滞留した水素ガスにより大爆発を起こし、そこから漏れ出た放射性物質が爆発地点を中心に広大な範囲に飛散し、東日本は地震、津波、そして原発事故の三重の巨大な災害に見舞われました。

この想像を絶する悲惨な大災害は、テレビ等のニュースとして連日報道されました。そしてこの惨事が、テレビの映像を介して全国に流されたことから、日本国中の人びとの心は不安と無力感に包まれ、まるで国全体が軽い抑うつ状態に陥ったかのように、私には感じられました。

一方、被災地の皆さんは、私たちには想像もつかないほどの悲惨な体験をしているにもかかわらず、落ち込んでいるかのような姿は少なく、むしろ毅然とした姿勢で、復旧に向けたそれぞれの役割に必死に励んでおります。家族や友人や家屋を失い、不幸のどん底にありながらもそれぞれが、『自分が立ち上がらなければ』、『自分が明るく振る舞わなければ』との強い思いを抱き、その力が悲しみの心を跳ね返しているかのように私には思われます。彼らの毅然としたその姿は、神々しくさえ感じられます。

頻発する余震の中にも拘らず、勇気と希望を失うことなく、整然と復興作業に励んでいる彼らの姿に、世界中から称賛の声が上がりました。

世界からのこの称賛の声は、被災者の皆さんの苦しい心を暖かく包み、癒し、希望へのエネルギーを与える大きな役割を果たしてくれたように思われました。加えてその声は、もはや国ごとうつ状態に陥っているかのような日本人全体の心をも癒してくれるものでもありました。

また、地震発生とともに、国内国外から続々と、救援隊が被災地へ駆けつけてくれました。同様に、国内国外から、善意の心のこもった膨大な救援金や物資が寄せられました。

このような状況の中で、勇気と希望を失わず、助け合い、分かち合いながら

の復旧・復興に向かう心のシンボルとして、『絆』という言葉が選ばれました。

それから 1 年が経過致しました。被災地の復旧・復興に向けた作業は、初期の段階においては迅速であり、順調に進んでいることが、誰の目にも分かりました。

ところがその後には、ほとんどの被災地域において、10 年分とも 20 年分とも言われる瓦礫が、うず高く積み上げられたままの状況が続いております。いまやこの未処理の瓦礫が、被災地域の復旧・復興を阻害している最大の理由であるとさえ言われております。

どうしたことでしょうか。事故原発の所在する福島県の瓦礫については、県内で処理せざるを得ないことは理解できます。ところが、放射性物質の汚染が少なく、医学的にも問題ないとされる岩手県と宮城県の瓦礫の処理までもが、大多数の自治体により協力を拒否され、放置されているのです。

このような日本の現状について、この 3 月 10 日のアメリカのワシントン・ポスト紙上に、同社の元日本特派員が、『悲劇は日本を停滞から目覚めさせるのに失敗した』と題して、次のような記事を載せていることが、3 月 13 日の産経新聞に紹介されました。

その中で筆者は、次のように述べております。

『日本の自治体が風評被害に悩む地域住民に気遣うあまりに、大事から目をそらし、被災地の瓦礫処理の引き受けを拒否している』。加えて、『東北の人々に国民は同情と支援を惜しまず、それは"絆"という言葉で表現されているが、その精神は色あせた』としており、東日本大震災直後に世界から称賛された日本国民の助け合い、分かち合いの精神が失われかけていることに、警鐘を鳴らしております。同時に筆者は、『かつての日本なら、災害や危機を糧として再生へ向う筈なのに、いまは"もがいている"』とし、日本の現状に嘆きながらも、『日本

は必ずや復興すると確信する』、と結んでおります。

世界は、大震災からの日本の復興に注目しております。そのためには、この大切な『絆』の精神を、私たちは決して放棄してはならないと思います。

ところで、この数日間の瓦礫処理に関するニュースを見ますと、遅まきながらもその行き着く先が、『絆』の精神に沿った方向に向かいつつあるように思われます。

3月11日の野田首相自らによる、瓦礫引き受けの協力要請についての記者会見を受けて、各県および自治体は、処理を引き受ける方向へと動き始めております。

一方、風評に躍らされている人たちも、風評に悩まされている人たちも、社会的には弱者です。そのような人たちに、事態を正しく理解してもらうためには何よりも、指導者たちによる誠実な、心のこもった説明が重要です。

『物事を着実に進めるためには、どのような小さな声にも誠意をもって対応する心が何よりも大切』と、あらためて感じております。

今日皆さんを見送るに当たり、このような内容の式辞はいかななものかと、いささか思い悩みました。しかし、余震による事故のないことを祈りながらの卒業式から満一年を迎えることができたことから、共通の問題として東日本大震災から派生した『瓦礫処理』の問題を取り上げ、共に考えてみたいと思った次第です。

卒業生の皆さん、どうかこれからも東日本大震災による被災地の復旧・復興を自分のこととして、強く関心を持ち続けてほしいと思います。

皆さんは今、晴れて東洋学園大学に別れを告げることになりました。これからは、社会の荒波の中で揉まれ鍛えられ、さらに成長してくれるものと、心より期待しております。

そして、青春の最も多感な時を過ごしたこの東洋学園大学を、『心のふるさと』
としていつまでも大切に思ってください。

私たち教・職員一同は、この東洋学園大学が皆さんの『心のふるさと』にふ
さわしい大学であり続けるために、これからも一層の努力を続けてまいります。

皆さんのこれからの新たな人生が実り多いものであることを祈りつつ、本日
の式辞を終えたいと思います。

平成 24 年 3 月 20 日

東洋学園大学学長 一ノ渡 尚道
(本郷体育館にて)